



### 生化学者の介護最前線

高齢化社会への進行が止まらない日本。2021年9月の時点では、65歳以上の高齢者が総人口に占める割合が29.1%と、ほぼ3割に迫っている。これは、なんと、世界で最高で、第二位のイタリアに6ポイントも差をつけて、ダントツの一位である。自分の周りを見渡しても、たしかに高齢者の範疇に入る人が増えてきたとしみじみ実感するこの頃である。とはいえ、40年前に祖父母を見送った頃、子供の目からみていた60歳と今の60歳ではまるで印象が違っている。見る側の変化も考慮すべきではあるが、医療の進歩や栄養の改善、電化製品の普及などにより、実際に若々しく元気な高齢者が増えているという。となれば、いわゆるシルバーパワーを最大限活用する社会にできるはずだし、そうしないとこの先、日本の社会は成り立っていかない。しかし、健康寿命と実際の寿命の間には10年近い開きがあるのが現実。このギャップこそが生物界ではヒトのみにみられる特有の現象であり、人間としての尊厳、人命の尊重ということの帰結といえよう。そこで必要になってくるのが、介護である。両親の介護をしながら日々感じていることをつぶやいてみたい。

母は10年ほど前から認知症を患い、父が日常生活の世話をしていたが、その父が心不全のためどんどんフレイルが進み弱ってきたことから、ある高齢者施設に入所させることにした。素敵な建物、中には立派な調度品がおいてあり、邸宅をおもわせる施設であったが、父も母も、環境が変わったことで、それまでかろうじてできていた様々な日常の所作が一挙にできなくなってしまった。これはまず

い、と2か月で退所、自宅に戻す決断をした。高齢者の環境を変えるときは要注意である。

心不全の病状が一進一退していた父は、自宅で美味しく食事をしっかりととりながらも、どんどん筋肉量が減少してゆき、体が店じまいのスイッチをいれてしまったかのようだった。血漿中にはきつとなにかプロテアーゼを活性化させてしまう物質がふえているのではないかと、採血、メタボロームをやってみたい衝動に駆られたのだが、そうこうするうちに心臓が大あくびをして本当の店じまいとなってしまった。心不全にありがちな肺水腫を起こすことなく、前日の夜までおいしく食事をとったあと、ある意味、大変理想的な旅立ちだった。心不全という末梢組織の低酸素状態とフレイルには関係があるかも、面白そう、と父の遺影をみながらちよいと不謹慎なことを考えている。

一方、認知症の母のほうは、父が他界したあと、私との生活を始めることになった。短期記憶の障害、意欲の減退、徘徊、という典型的な症状を呈するアルツハイマー型認知症で、SPECT検査でも典型的な後頭葉の血流低下があった。耳が遠かった父との生活ではほとんど会話ができていなかった母は、私との生活でよくしゃべり、よく笑うようになった。徐々に徘徊はみられなくなり、ほったらかしだった身の回りのことを自分でするようになり、完全ではないものの短期記憶もすこしずつもどってきている。ちょうど、コロナ禍で私の出張がなく、ほぼ毎日、一緒に生活できているのが幸いしていると思う。このところ、できなかつたことができるようになってくる母を見るたびに、なんともいえない嬉しさを味わう。よくできたね!とぎゅっとハグ。砂川啓介さんの著書『娘になった妻、のぶ代へ』を読み、まさに今の母は私の娘になっていると感じる。80歳を超えた脳にも、まだ可塑性が残っているのかと、再度SPECTの結果を見たい気がする。そして、ひとつ後悔する。症状が最悪だったころの血漿をとっておくべきだったと。

(春空山水)